

第三百五十九回 青葉会

平成二十八年二月二十五日(木)

午後五時半〜八時半

丸紅来客食堂(談話室)

(顧問)

☆ 川合万里子 先生

(選者)

◎ 川口孤舟

(出席者)

伊賀山そらお 今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤保明

豊田ゆたか 中野一灯 中山芳博 山崎亜也 山内天牛

(投句)

小西弘子 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 古田昇 星田啓子 宮内規雄 渡邊盛雄

(紙上選句)

赤田堅 安部眞希子 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章 福島正明 村田くに子 山崎青史

山本三恵

《五選句》

◎ 凍滝(いてたき)の解けて時間の流れ出す

昇 (忠・万・孤・五・敏・ゆ・灯・芳)

十点

◎ 凍滝(いてたき)の解けて時間の流れ出す

昇 (忠・万・孤・五・敏・ゆ・灯・芳)

允(正)

(☆:中七・下五が説明調となるので語順を少し変えて「凍滝の解け流れ出す時間かな」)

七点

☆ 廃盤の昭和の音色春の宵 孤舟 (そ・[●]万・龍・敏・ゆ・灯・正)

六点

☆ ぶぶ漬に壬生菜を添へて知足かな 亜也 (猛・[●]万・龍・敏・芳・三)

五点

☆ 一湾の廃炉眼下に鳥帰る 盛雄 (眞・紀・万・五・灯・允)

◎ 春寒や的射る矢の音未だ硬し 保明 (猛・忠・孤・敏・正)

☆ 不思議なる赤子の笑みや春隣 規雄 (眞・万・龍・芳・天)

(☆:語順を変えて「赤ん坊の謎(なぞ)めく笑みや春近し」)

☆ 春の雨宵の銀座の蛇の目かな 亜也 (紀・万・ゆ・允・天)

(☆↓「春宵の雨の銀座へ蛇の目かな」)

◎ 生涯に幾度の出会ひ古雛 盛雄 (そ・孤・敏・ゆ・亜)

四点

☆ 長旅の無理な身となり残り鴨 忠彦 (猛・万・保・く)

☆ 春立ちぬ自転車相乗る老夫婦 全 (紀・万・龍・允)

(☆:「イ」音を重ねてリズムカルに!「老夫婦自転車相乗り春立てり」)

☆ 斧の音止み谷越えの木遣節 一灯 (万・龍・ゆ・天)

(☆:上五は季語にならないので「斧仕舞して…」では如何か)

◎ 以下同文表彰うけて卒業す 芳博 (眞・万・孤・天)

(☆:語順を変えて散文調から脱し、俳諧の諧味も幾分生かして「卒業や以下同文の表彰状」)

三点

☆ 冬空の青さの中に重力波 忠彦 (そ・灯・芳)

☆ 春寒や終の別れは手を振らず 孤舟 (●万・允・く)

☆ 浅き春少し早まり爪の伸び 保明 (猛・万・三)

(☆:語順を変えて「爪の伸び少し早まり春浅し」一番言いたいことを先に表現すること!)

◎ 踊り子の越へし峠や春霞 弘子 (孤・灯・允)

☆ 少子化の重き荷を担ふ卒業生 健介 (紀・万・正)

☆ 籠(へっつい)や直哉の旧居梅の花 ゆたか (青・天・三)

☆ 大海や虚空渡る日春立ちぬ 全 (堅・五・芳)

☆ 城門へ雪燈籠の灯(ほ)影道(弘前城) 一灯 (万・ゆ・芳)

☆ 雪被(かざり)り花の紅さの際立てり 啓子 (紀・万・敏)

(☆:単に「花」と言えば桜をさすことは俳句の約束の一つ。雪と重複するので一考を要します)

☆ 春愁や絆消えゆく家族葬 盛雄 (忠・万・く)

☆ 春浅し龍の舞ひ出る中華門 そらお (万・正)

二点

☆ 鈍色の海を残して二月往く 全 (五・保)

☆ 牙返る花魁(おいらん)殺し息呑みて「籠釣瓶」 紀久男 (そ・く)

☆ 春一が御髪(おぐし)と裾にいたずらす 猛 (万・龍)

(☆↓「春一や御髪や裾へいたづらし」)(春一:春一番)

寒明けや空の青さの無限あり 恭延 (紀・く)

初雛を楽天で買ふ若い親 忠彦 (保・灯)

万葉の恋の七色春の虹 孤舟 (そ・三)

- ☆ フリージアの香りとなりて少女来る 全 (正・三)
- ☆ 遅しや舗装路割れ目に草青む 保明 (猛・万)
- ☆ 太夫またひとり引退梅白し(嶋大夫) 五郎太 (紀・万)
- ☆ 春嵐見る間に曇る窓の内 全 (万・保)
- ☆ (☆:上五。切字「や」を用いて詩のリズムを得たい「春嵐や...」)
- ◎ 佳酒得たり名付けて立春朝搾り 惠洲 (紀・万)
- ◎ 落研の出囃子むかし春の宵 堂哉 (孤・亜)
- ☆◎ ともせりダム解き放つ雪解水 一灯 (万・孤)
- (☆↓「響動(ともすや...」)
- ☆ 火の酒に氷柱(つらら)がち割りシーハイル 全 (眞・紀)
- ☆ 鬼は外人間擬(もと)き一人酌む 芳博 (万・亜)
- ☆ 赤マフラー似合はぬ彼氏連れてくる 全 (亜・天)
- ☆ チョコレートからミモザへ移る街の色 正明 (万・五)
- ☆ 長袖で太極拳が打つ余寒 全 (紀・く)
- ☆ 老輩にバレンタインという厄日 昇 (忠・万)
- ☆ 艶紅(つやべじ)の造り椿やお水取り 啓子 (堅・亜)
- ☆ 選(よ)りによつて春寒の日の床屋かな 天牛 (萬・青)
- ☆ 神の手か眼の手術終へ春眩し 全 (萬・紀)
- (☆:「終へる」では「神の手」にふさわしくないので↓「神の手が眼の手術成し春眩し」)
- ☆ 声潜め二粒三粒豆を撒く 全 (猛・保)
- ☆ 生垣の陰に椿の紅(べじ)明り そらお (堅)
- ☆ 探梅や昔の悔いがよみがえり 全 (忠)
- ☆ 雪国の美酒酌み交す句会かな 紀久男 (万)
- ☆ 陛下ゆく慰霊冬旅フイリピンへ 全 (忠)
- ☆ 浅春やつぶやくやうな師の小唄 全 (く)
- ☆ 友老ひたり我も同じか紅白梅 全 (堅)
- ☆ 鍋物に春菊ありて主張する 猛 (万)
- (☆:「主張する」が詩になじまないのので↓「春菊の香氣際立つ鍋料理」)
- ☆ 春告げる障子の陽ざし柔らかく 全 (堅)
- ☆ 春光の縁はひとりに余りある 孤舟 (五)
- ☆ 春の風ピレウスといふ店に入り 五郎太 (三)
- ☆ 雑用を買つて出かける春時雨 保明 (亜)
- ☆ 春節祭獅子跳ね踊り赤子泣き 全 (眞)
- ☆ 夕暮れの空へ影待つ桜の芽 弘子 (万)
- ☆ 春めくや老いて壮んのロツク歌手 惠洲 (万)
- ◎ 恋猫の敵前逃亡路地に消ゆ 堂哉 (孤)
- ☆ 居酒屋の粕汁粋な伏見ぶり 全 (堅)
- ☆ 春の空蹴り上げ高しラグビー球(☆:季重なり) ゆたか (万)
- ☆ ふるさとや春夜潮騒胸にきく 全 (敏)
- ☆ ループもて辿る山地凶雪明かり 一灯 (眞)
- ☆ 絵馬あまた湯島境内梅まつり 芳博 (万)
- (☆:三段切れになつていたので要注意↓「梅まつり湯島天神に絵馬あまた」)
- ☆ 赤ん坊の不意の嚏(くしゃみ)に笑ひけり 規雄 (そ)
- ☆ 春立つや土をいぢるは久々で 亜也 (万)
- (☆↓「久々に土をいぢるや春立てり」下五・中七・上五の順番のほうが活力が在る)
- ☆ 春立つ日妻(さい)がわれもと花粉症 亜也 (保)

一点

●次回青葉会

三月二十四日(木) 午後五時半から八時半 丸紅 コンチエルト(談話室)
 ▲当季雑詠五句 投句二句
 四月二十八日(木) 全
 五月二十六日(木) 井の頭公園吟行
 以上文責 紀久男

平成二十八年二月句会報

一 今回は孤舟選者以下12名出席。投句9名。万里子先生の現況（誕生日お祝・五月井の頭吟行参加の可能性など）、一灯さんの句集の好評と影響（傘寿や米寿記念に企画する人が出てきそう）、朝田会長の日経夕刊連載中の「明日への話題」（ポツテイチェリの絵・古川元専務の小学校舎寄贈など）、社友会ホームページの充実と活況（編集長の恵洲さんの活躍ぶり）など話題にし乍ら一灯さん寄贈の純米「南」（土佐）、忠彦さんからの純米吟醸「浦霞・禅」（宮城）、小生の目高佃煮（新潟では「うるめ」養殖）と生酒「米鶴」（山形）を賞味しつつ開始。
いつもの猛さんの進行役で、御覧のように昇さんがダントツ。盛雄さん、亜也さん、保明さんが好成績でした。尚、コンチエルトよりエビスビールの小ジヨッキ一杯を全員に振舞われ、有難く頂戴しました（三日間だけの無料サービス企画）

二 関係者近詠

未明から高音早口鶴鶴

万里子

水音に弾みそめたる猫柳

允章

野兎跳ぶや車道となりし獣道

全

青餽や女将鬘肩の仲間たち

全

今年こそ一日一句日本晴

全

雲割れて日矢降りそそぐ春の海
不意に鳴る踏切の音冴え返る

全

飛石に毛繕ふ猫冬温し

全

割烹着脱ぎつつ歌留多に母も来ぬ
古書店巡り収穫なくて冴え返る

全 恵洲

末つ子が妹と呼ぶ白兎

全

古書店巡り収穫なくて冴え返る

全

曾孫のお披露目し合ふ女正月

全

古書店巡り収穫なくて冴え返る

全

美容師へ土産に摘まむ蒔の薑

全

鳩（かいつぶり）思はぬ遠きに浮き上る

全

雨漏りを直し雨待つ日向ぼこ

全

鳩（かいつぶり）思はぬ遠きに浮き上る

全

渡船のみ海峡縦断冬鷗

全

冬麗や心しずむる「安」の文字
浮き沈むはかなき日々の柚子湯かな

全 盛雄

山眠り人は番号つけられて

全

揺れ動く原発岬草青む

全

公園の深き落葉を踏みに行く

全

蒼穹に白をちりばむ梅古木

全

身のうちの瑠璃見せ鴨の羽搏けり

全

若者よ希望もてよと初日の出

全

木も貝も昨日の欠片冬の浜

全

急ぐなと論す師走の星座かな

全

歳晩や浜屋の闇へ男入る

全

怒り越え師走のパリの鎮魂歌

全

偕老の以心伝心根深汁

全

初詣望みを託す癌手術

全

妻の足となりてふたとせ雪もよひ

全

梅見頃花形そろふ舞台かな

全

枯菊に焚かるる時の来て焚かる

全

吉報に訃報も交る余寒かな

全

盟神探湯も斯くやの風呂に冷えし身を

全

振袖や初立会の鐘を打つ

全

七五三孫が見真似で五七五

全

あつさりと心打ち明け冬薔薇
最後には心とこころ時雨傘

全

横のもの縦にしてみる夜長かな

全

あつさりと心打ち明け冬薔薇
最後には心とこころ時雨傘

全

「萬緑」 二月号

全

あつさりと心打ち明け冬薔薇
最後には心とこころ時雨傘

全

「俳句」 三月号

全

あつさりと心打ち明け冬薔薇
最後には心とこころ時雨傘

全

汚れなき空一塊の帰燕あり

全

枯木立雨の愛撫のなめらかに

全

青鷹颯れて山河を引き締むる

全

茶の花や咲き継ぎこぼれ継ぎながら

全

迫り来て嶺まだ遠し冬の虹

全

次世代をせつに願ひぬ冬の虫

全

湖は晏如（あんじょ）の峙白鳥来

全

冬莖共に歩める嬉しさに

全

街灯に人のぬくもり夜鷹蕎麦

全

静かなる二人の昼餉花菜漬

全

鶏旦の曙光まぶしき爽樹かな

全

黄梅の風鳴る垣に開きそむ

全

磯波をあかねに染めて大初日

全

臉には伊予の海ある蜜柑かな

全

春の野往かむ十哲に支へられ

全

演奏会・句会・飲み会二月尽

全

「爽樹」 1月号

全

春着して芝居談義の蕎麦屋かな

全

「爽樹」 1月号

全

春着して芝居談義の蕎麦屋かな

全

「爽樹」 1月号

全

春着して芝居談義の蕎麦屋かな

全

「爽樹」 1月号

全

春着して芝居談義の蕎麦屋かな

全

「爽樹」 1月号

全

春着して芝居談義の蕎麦屋かな

全

「爽樹」 1月号

全

春着して芝居談義の蕎麦屋かな

全

「爽樹」 1月号

全

春着して芝居談義の蕎麦屋かな

全

「爽樹」 1月号

全

春着して芝居談義の蕎麦屋かな

全

「爽樹」 1月号

全

春着して芝居談義の蕎麦屋かな

全

平成二十八年三月十六日

紀久男記